森山啓の社会主義リアリズム論

――プロレタリア文学運動と人民戦線に関する一考察――

桑尾光太郎

はじめに

作家森山啓（一九〇四～一九九一）は、一九三〇年代にプロレタリア文学の批評において活躍した。森山は一九三三（昭和八）年から創作方法論の紹介と分析に取り組み、気鋭の理論家として注目された。そして「蔵原惟人・中野重治・壺井繁治・窪川鶴次郎などのプロレタリア評論家が検挙され、「ナルプ」も解散したのちは、「社会主義的リアリズム」をかかげて『文化集団』『文学評論』などにおいて評論の筆をふるい、プロレタリア文学の最も困難な時期の孤塁をまもって活躍をつづけた」[1]。

プロレタリア文芸雑誌の『文学評論』（一九三四年三月～一九三六年八月）には、森山の創作方法論や文芸時評が毎号のように掲載された。左翼系の評論家からも「今日身体の自由なマルクス主義的文芸評論家の随一」（戸坂潤）[2]と目され、「今後正統プロ派の理論家としての成長を期待」（大宅壮一）[3]されていた。森山はナルプ（日本プロレタリア作家同盟）が解散する一九三四（昭和九）年前後の、プロレタリア文学を代表する評論家だった。

本稿ではその時期の森山啓の評論活動が、ファシズムに対する抵抗の契機をもちえたかを検証していく。換言すればそれは、森山による社会主義リアリズム論が、文化運動における人民戦線を準備するものだったかを確認することである。

一九三六（昭和一一）年、二・二六事件直前の二月二〇日に実施された第一九回総選挙では、無産政党が当選者二二名を出し、前回（一九三二年二月）の五名から大幅に躍進した。反ファシズムをかかげ東京五区から立候補した労農無産協議会の加藤勘十は、六七万という全国最多の得票数を獲得している。労働組合の間では前年から合同運動が起こり、統一戦線結成の機運が高揚していた。さらにコミンテルン第七回大会決議や、フランス・スペインにおける反ファシズム人民戦線運動が新聞・雑誌でも紹介され[4]、一九三六年のなかばには「粛軍」的空気のなかで、「人民戦線」が論壇を賑わせた。人民戦線への志向は、日本の社会にも根強く存在していたのである。

戸坂潤は当時の状況を、「日本の人民戦線の動きは、思想としてはすでに成り立っている。思想上の目標・拠り処・希望としてはだ。

だが政治上の現実としてはそれは単にまだ成立していないばかりではなく、それへの動きそのものさえが、まだハッキリとした客観的現実となっていないのが事実である」[5]と把握していた。だからこそ、「文化運動に於ける人民戦線」の重要性を強調する。

人民戦線という言葉の魅力は、政治的にはまだその準備を完全になし得ていないと思わねばならぬ特殊事情にある日本では、相当観念的なものなのだ。だがだから駄目だというのではなくて、却ってそれ程之は文化上の、また文化運動上の、意義を有っていると云うのである。(中略)いうまでもなくファシズムの本質はその巨大なデマゴギーの内に横たわる。反ファッショ的な人民の戦線にとってはこのデマゴギーに対する批判的で啓蒙的な文化上の意義は絶大なのだ。日本の人民戦線は之を文化運動上からも把握することが、特に必要なのである[6](傍点引用者、以下ことわりない限り同様)。

文化運動における人民戦線の実質は、「文化活動の公然たる社会的組織化と大衆の壇に立つ文化内容＝文化の大衆性[7]」である。「文化活動の公然たる社会的組織」は、一九三〇年代前半にはプロレタリア文化運動という形で存在していた。したがって、文化運動における人民戦線のさしあたっての担い手としては、プロレタリア文化運動の経験者が考えられる。

日本における人民戦線運動は、「規模も力量も弱小で、成功したのは労働戦線の統一に限定されていた[8]」と評価されている。とくに文化運動は、「我が国に於ては未だ広汎な人民戦線は結成せられず、僅かに京都に於て文化分野に於ける人民戦線運動が行はれたにすぎない[9]」と見なされるほど微弱なものだった。その要因として、治安維持法と特高警察を中心とする弾圧、人民戦線を指導すべき共産党が潰滅していたこと、あるいは排外主義の高揚のなかで、反戦反ファシズムが大衆の支持を得られなかったことなど、諸々の条件が挙げられるだろう。しかし本稿ではプロレタリア文化運動、とりわけその中核的役割を果したプロレタリア文学運動に内在する原因の究明をこころみる[10]。

「ソビエト文学の基本的方法」として提唱された社会主義リアリズムは、日本でも一九三三年から三五(昭和一〇)年にかけてさかんに議論された。ナルプの創作スローガンだった「唯物弁証法的創作方法」は、三三年の時点で既に破綻していた。その破綻は、日本共産党――日本プロレタリア文化連盟(コップ)――ナルプという組織の瓦解と不可分だった。社会主義リアリズムに関する様々な議論は、創作方法論の範囲にとどまらず、組織論・運動論を含めたプロレタリア文学全体のありかたの転換を迫られて行われたのである。議論のゆくえは、以後のプロレタリア文学運動の方向を決定するといっても過言ではない。森山啓は、つねにその議論の中心に位置していた。

ゆえに、プロレタリア文学運動が人民戦線的な論理を獲得することができたか、あるいはできなかったかという問題は、森山の社会主義リアリズム論を見直していくことで、その一端が明らかになると考えられる。

一　唯物弁証法的創作方法の批判

社会主義リアリズムは、一九三二年一一月のソビエト作家同盟組織委員会で提唱され、日本には『プロレタリア文学』一九三三年二月号で初めて紹介された。その内容自体にふれる余裕はないが、日本においてこの創作方法は、ナルプの組織的危機という状況下で、ナルプに対するアンチ・テーゼとして機能した一面をもつ。その代表例が徳永直の「創作方法の新転換」(『中央公論』一九三三年九月)である。徳永はナルプの創作スローガンだった唯物弁証法的創作方法を、「主観的、観念的にあやまられた芸術方法上の毒蟲」[11]と全面否定し、その根拠として社会主義リアリズムの主唱者であるキルポーチンの発言を多分に援用した。このことは徳永がキルポーチンによって、ナルプの理論的指導者である蔵原惟人を否定したことを意味した。「創作方法の新転換」発表後まもなく徳永はナルプを脱退し、プロレタリア作家の組織離れに拍車をかける結果を招いた。

その一方で、社会主義リアリズムを反ナルプの旗印としてではなく、唯物弁証法的創作方法の欠陥を補う方法として理解しようとする動きもあった。その最も熱心な論者こそ森山啓である。森山は徳永に、「作家の世界観とその創作方法との密接な関係を切断することによつて、「創作方法における唯物弁証法のための闘争」の日本における成果を総て抹殺する傾向」[12]があると批判し、蔵原惟人を擁護した。そして「現実認識における唯物弁証法」という方法そのものにではなく、それを正しく発展させなかったところに、現在の誤謬――批評の図式化と政治主義的偏向――が発生すると主張した。森山もキルポーチンを積極的に援用するが、それを徳永直のようにナルプ指導部批判には決して用いていない。森山は蔵原の理論の延長線上において、創作方法の再検討に取り組んでいった。

森山の議論は、蔵原惟人の理論を継承・発展させる見地からその批判的検討に着手し、その欠陥を指摘したのち、「ソ同盟における創作方法の再討議」つまり社会主義リアリズムをめぐる議論が、いかに欠陥を克服しようとするものであるかを紹介する、という手順が取られている。徳永直の蔵原攻撃は、ナルプ指導部側から「敗北主義」「反同盟的デタラメ」「鍋山の見地を補ふもの」[13]等のレッテルを貼られ、これに林房雄が反批判を提出するなど騒然[14]たる議論を巻き起こした。一方森山の慎重な姿勢は、ナルプ指導部からも林ら反ナルプ派からも好意的に迎えられた。この姿勢は、森山がナルプ解散前後という時期に、精力的な活動を展開する土台となった。

一九三三年の後半に、森山は本腰を入れて蔵原惟人の批判的検討に取り組んでいく。森山は唯物弁証法的創作方法による創作実践が「しばしば現実からひきはなされ勝ちであり、批評は命題を刻りつけた棍棒となり潑剌性を抑へられると感じ勝ちであつた」[15]理由を、方法と世界観の関係が明確にされていないためだと説明した。そして「芸術創造の方法」すなわち創作方法を、次のように定義する。

創作方法一般は、芸術創造における現実認識とそれの芸術的・形象的表現の方法である。その場合、現実に対する方法とそれの表現の方法とは不可分の関係にあればこそそれを統一して創作方法と呼ばれ得るのであるが決してその一つをもつて他に置きかへうるものではないのである。[16]

蔵原惟人は「我々に必要な創作方法、もしくは芸術的方法とは、具体的にはどういうことを言うのであるか？　それはまず第一に事

物に対する正しい具体的な認識――すなわち弁証法的唯物論の認識である」[17]と主張した。それは「現実に対する方法」以上のものではない。ところが蔵原は創作方法におけるもう一つの側面、「表現の方法」＝「芸術創作の方法そのものの特殊性」を、具体的に検討していなかった。このことが、「芸術創造の方法を単に現実認識の方法によつて置き代へるやうな結果をもたらした」[18]のだと、森山は指摘する。そこで作品批評をおこなう場合、作品における作家の現実認識――唯物弁証法による認識――は、どれだけ高いマルクス主義的世界観に達しているかということが、最大の評価基準となる。つまり唯物弁証法は、プロレタリア作家を高い世界観へ導くための方法としてではなく、最初から高い世界観を作家に要求する方法として機能したのである。その結果、高い唯物弁証法的認識――マルクス主義の世界観をもち実践にまで結びつくこと――の獲得にまで至らない作家を、「右翼的」「非プロレタリア的」として排除する「棍棒」批評が生まれた。

森山は創作方法を規定し直すことで、従来のスローガンには表現方法の検討がなされていない欠陥を指摘し、そこから生まれる弊害を明らかにした。徳永直は「プロレタリア作家の真理をもつて小説をつくれ！――かゝる命題は、どうひつくりかへしてみても、具体的な芸術方法としては、それ自体意味をなさぬではないか！」[19]と唯物弁証法的創作方法を糾弾したが、森山は蔵原惟人を否定しないよう注意深く論を運んだ。蔵原を否定しないとは、唯物弁証法による認識そのものを否定しないということである。つまり森山は、マルクス主義の世界観の根幹を動揺させないように尽力したのだった。

では唯物弁証法的創作方法の欠陥を補い、現実認識の方法と表現技術の方法とを統一した正しい創作方法とは何か。その理論的確立はプロレタリア文学運動全体の課題であるが、社会主義リアリズムは、まさにその課題にこたえるものとして多くの作家たちに理解された。そして「全文学の羅針盤だ」（細田民樹）、「一つの救いであつた」（本庄陸男）[20]というように、好評をもって迎えられた。『文化集団』一九三三年八月号には、以下のようなキルポーチンの論説が紹介されている。

社会主義的レアリズムは――疑固（ママ）せる聖典でなく、考案された死せる規矩ではない。社会主義的レアリズムは――すでに生誕し発展しつゝある文学的スタイルである。それは――過程である。社会主義的レアリズムは種々なる作家によつて技巧の種々なる程度に於いて、それの領（ママ）獲得の種々なる程度に於いて実現される。それは個人的特殊的方法によつて、異れる創作方法と傾向との競争の中に実現されるであらう。[21]

社会主義リアリズムは、「凡ゆる異れる創作的個性と方法とに拘らず」[22]、世界についての「社会主義的真実」を語ろうとする作家を再編成するためのスローガンとして唱えられた。そしてそれは「過程である」ことで、作家の個性――森山のいう「芸術創作の方法そのものの特殊性」――を保証する。唯物弁証法的創作方法でふれられなかった芸術的方法の存在が強調されることによって、社会主義リアリズムは、作家の多様な個性の発揮を可能にする創作方法と考えられた。[23]森山も社会主義リアリズムを、唯物弁証法的創作方法の単なるアンチ・テーゼとしてではなく、マルクス主義の世界観をも

ちながら「芸術の特殊性」を保証する創作方法と紹介したのである。

しかし森山は、「ソ同盟で、作家はそれぞれ異る道を通つて社会主義的レアリズムを作品に実現し発展させてゆくものであると主張され作家の才能、個性等も重視されてゐるのは全く正当である」[24]とは述べたが、それを日本には当てはめていなかった。一九三三年に発表された森山の論文は、あくまでソビエトにおける創作方法論の紹介と分析という範囲を超えず、「社会主義的レアリズム」という言葉も数少なくしか使用されていない。森山は社会主義リアリズムが、安易に日本のスローガンとならないように配慮していた。

社会主義リアリズムとは、ソビエトにおける社会主義体制の建設を前提として提唱されたスローガンだった。キルポーチンは先に紹介した発言のすぐあとに、「凡ゆる異れる創作的個性と方法とに拘らず社会主義的レアリズムは世界についての社会主義的真実を語るところの、勤労民の広汎な層を社会主義的精神に於いて無階級社会の創造のための闘争の精神に於いて「教育」するところの文学を創造する」[25]と続けていた。「無階級社会の創造のための闘争の精神」とは、ソビエトでは体制擁護のイデオロギーを意味するが、日本においてそれは、現体制を否定する革命の精神たらざるを得ない。ソビエトと現体制の異なる日本において、「社会主義的真実を語る」とは、要するに革命を志向することである。社会主義リアリズムは「芸術の特殊性」を保証するとはいえ、作家に対する政治的要請を弱めたものでは決してなかった。その芸術的表現の方法云々がどうあれ、プロレタリア作家に課せられた政治的任務を強調するものにほかならない。だが日本のプロレタリア文学運動における最大の困難は、いうまでもなく「組織活動と創作活動との弁証法的統一」の名目によって作家に課せられた政治的任務と、それを対象とする弾圧の激化だった。こうした状況に社会主義リアリズムをそのままもちこんだとしても、それは文学運動再建にむけての打開策にはならない。

ソビエト作家同盟組織委員会での報告が『プロレタリア文学』で紹介されて以来、日本では唯物弁証法的創作方法の持つ欠陥が明らかにされ、社会主義リアリズムは正しい創作方法として認知されるようになった。社会主義リアリズムの紹介及び理論的検討は、一部ではナルプ攻撃に利用されたりしたが、総じて慎重にすすめられた。その中心として、森山啓は獄中の蔵原惟人にかわる活躍をみせた。しかし社会主義リアリズムを、日本の現実に対応した創作スローガンとしていかに成立させるかという問題は、ナルプ指導部はじめ誰もが解決できなかった。森山も社会主義リアリズムの日本における妥当性を、一九三三年の段階では確言できなかったのである。

二　ナルプ解散と社会主義リアリズム論の展開

一九三四年二月二二日、ナルプ拡大中央委員会は組織の解散を決定し、三月一二日付で「ナルプ解体の声明」を発表した。解散にあたって責任者的な役割を果した鹿地亘は、「プロレタリア文学を守ること。私たち自身の可能な方法でそれをやることだ(中略)少なくも我々は政治家ではない。文学者として真実を語り真の文学を建設しやうとする限り、即ちある政治的目的の下にその仕事が組織化されてゐない限り、今日、まだ文学の仕事は制限はあれ保証されてゐ

る。この可能性は放棄されてはならない」[26]、だからこそ、近日中に非合法となるであろうナルプを解体したのだと説明した。ここで目につくのは、「ある政治的目的の下に組織化」されることが、「文学者として真実を語り真の文学を建設」することと対立している点である。

一九二八(昭和三)年のナップ(全日本無産者芸術連盟)結成から、ナルプ解散へ至るまでのプロレタリア文学運動の歴史は、「ある政治的目的の下に」作家たちの芸術活動が組織化されていく過程であった。そのことによってプロレタリア文学運動は、現実の中の真実を見いだし「真の文学」を建設しようとした。ナルプ解散に際し鹿地亘すなわち指導部は、この原則を否定した。解散は単に組織を解消することによって、作家の活動の合法性を確保するために行われたのではない。それはプロレタリア作家の政治的後退でなく、政治の拒否というニュアンスを含んでいた。[27]

ナルプ指導部は、政治的要請から解放された作家が創作に専念し、プロレタリア文学は今後新たな発展に向かうであろうとの見通しをもって、次のように声明書を締めくくった。

かかる見通しの下に、我々は光輝ある歴史を持つ日本プロレタリア作家同盟の解体を宣言する。このことはプロレタリア文学の放棄を意味するものではなく、今日の情勢に適応しない形式をやめて、プロレタリア文学のより高き発展に最も合理的な解決の途を拓くことである。(中略)理論上・創作上の方向について言うならば、今日ほど我々は、豊かなる文学的成果を約束されている時期はない。社会主義的リアリズムの方法の導きの下に、すぐれたるプロレタリア文学の創造社会主義的競争を開始せよ。かかる実質的文学的活動に於いて諸グループは相互の高き文学的成長のために協力せよ。[28]

一九三三年における社会主義リアリズム論では、社会的現実の異なるソビエトの創作方法を日本にいかに導入するかが、課題として残されていた。だが「直接の政治的課題」から離れたプロレタリア作家にとって、そのような課題はとりあえず関係がない。そこで指導部は、社会主義リアリズムを「プロレタリア文学の創造社会主義的競争」の指針と位置づけた。社会主義リアリズムが芸術表現の方法としてすぐれているならば、それは容易に受け入れられるようになったのである。社会主義リアリズムはナルプが解散することによって、日本のプロレタリア文学のスローガンとして掲げられた。これはマルクス主義運動の退潮を背景とした、プロレタリア文学運動の非政治化の結果にほかならない。ソビエトと日本では事態が全く逆だった。

『文学評論』一九三四年四月号の徳永直による巻頭言は、「「ナルプ」においては、「技術」の問題については、極めて素朴な見解しかなかつた」が、「今や吾々進歩的、ないしはプロレタリア的作家は、「技術」の問題を日程とする段階にまで発展してきたのである」[29]と評価した。ナルプ解散を徳永は、プロレタリア文学の発展と認識していた。また川口浩は、「これで遂に、行くべきところまで、行き着いたわけだ。いまはもはや死児の葬送曲をかなでゝゐるべきではない」[30]と解散を迎えた。川口の「否定的リアリズム」論は、後述のように森山啓との論争をひきおこすが、基本的には川口も社会

主義リアリズムを「プロレタリア文学再建運動の方向」とすることに賛成していた。

社会主義的リアリズムの提唱の意義を、文学理論の面について考察するならば、それは、マルクス主義文学論における、旧来のイデオロギー万能説、もしくはイデオロギー偏重説の終極的な清算である、と私は理解する。(中略)プロレタリア文学論は、ながい間、イデオロギーの世界を彷徨したのち、いまやようやくその呪縛からのがれて、文学の本来の故郷へもどつた、と確言して差支へないだらう。[31]

ナルプ解散前後の一九三四年前半には、プロレタリア作家たちの手で『文学建設者』(二月)・『文学評論』『詩精神』(三月)・『関西文学』『現実』(四月)といった雑誌が次々に創刊された。三二年のコップ弾圧で検挙された窪川鶴次郎・中野重治・村山知義・壺井繁治らも出獄し、創作・評論活動を再開する。また、島木健作が「癩」(『文学評論』一九三四年四月)で登場し、一躍プロレタリア文学を代表する作家となった。政治的桎梏から解放された――政治的任務を放棄した――作家たちは、解体声明書の見通しのごとく旺盛な活動を始めたのだった。

ナルプ解散の是非が作家たちの間で討論された際、森山啓は「思想というものはいったんめざめたら、眠ることはできない。何をする勇気をもてなくなっても、心だけは変わらないのだ」と語り傍観的態度を取ったという。[32]森山は解散を「これは明かに退却であるが、食い止め得ない、必然な、一時的なものであらう。これを何らの退却でもないと弁ずる人もあるが、大衆の前には正直であるべきである」[33]と評した。それは徳永直や川口浩のような、解散を発展過程と見るような楽観論と一線を画している。

一方で、森山の創作方法――社会主義リアリズム――論の内容は、前年から変化していった。すなわち森山は、社会主義リアリズムを日本のプロレタリア文学の指針とすべく、積極的な理論的検討を展開していくのである。長谷川一郎・川口浩の社会主義リアリズム論に対する森山の批判を見ていくと、その変化があきらかになる。

唯物論研究会のメンバーだった長谷川一郎は、「社会主義的リアリズムとは、ソビエート的現実と唯物弁証法的方法との統一されたもの、即ち芸術様式なのであつてそれ故にそれはより具体的なのであり」[34](傍点原文)、単なる方法ではない、したがって日本的現実の中で、社会主義リアリズムの方法が直ちに可能であるという意見には反対だと主張していた。これに森山は、「「社会主義的」といふ言葉には階級的世界観の立場が表現され、リアリズムといふ言葉には、作家が現実そのものから出発するといふ現実に対する認識態度と同時に、それの芸術的表現についての主張をも表明しているので」[35]、ソビエトでは創作方法上のスローガンとなっているのだと反論した。長谷川が社会主義リアリズムの構成要素を、ソビエト的現実と唯物弁証法的方法に求めたのに対し、森山は階級的世界観・現実認識の方法・芸術的表現の方法を挙げて対抗した。

森山はさらに、これらの要素は、現実の姿にかかわらず――ソビエト的現実にあっても、日本的現実にあっても――作家の実践によって獲得できると主張した。現実認識の方法と表現技術の方法が統一された創作方法は、階級的世界観をもつ作家にとって、日本にお

いても可能かつ正当な方法と考えられたのである。日本はソビエトと現実が異なるのだから、社会主義リアリズムを適用することはできないという長谷川の主張は、森山には創作実践の発展の妨害と映った。

社会主義的リアリズムなるものを、創作実践のための合言葉として理解するならば、又「社会主義的現実」なるものがソヴェート的現実は世界の……の一部であると理解するならば、創作における「社会主義的リアリズム」の道は世界を貫き得るものであらう。[36]（「……」は伏字部分。以下引用史料で出てきた場合同様）

同じ時期に、森山は川口浩とも論争をおこなった。川口の主張を要約すると以下のとおりである。現実そのものが社会主義的＝「ポヂテイブ」なときに、作家はポジティブな真実について語ることができる。「かくて、社会主義的リアリズムは、ポヂテイブな肯定的な、能動的なリアリズムである」が、日本では現実そのものが「ネガテイブ」なものに支配されていて、「作家がポヂテイブな真実についてかたることは非常に困難」だ。しかしながら「現実そのものが堪えがたいまでにネガテイブであるとき、そのただれた上皮をひんむくことは、ポヂテイブな真実をかたることにくらべてけつして劣るものではない」。ゆえに「再生プロレタリア文学の一つの方向として、ポヂテイブなリアリズム（中略）とともに否定的リアリズムが考えられるべきではないか」。[37] 森山はこれに「妥協することができなかった」[38]として、すぐさま批判を加えた。

否定的リアリズムも端的に言えば、長谷川一郎の論同様ソビエトと日本との現実の違いを強調したものだった。森山にとって、「現実をネガテイブなものとポヂテイブなものとに分かちかゝるものと観じてそれを描くことは、社会主義的リアリズムの方法ではない」。[39] 森山は川口の提唱を、プロレタリア作家の世界観の動揺の結果生まれると見た。

文学的素材としての種々の現象が「ネガテイブなもの」であるか否かは、われわれのリアリズムの歴史的性質を決定する根本的なものではない。リアリズム――現実から出発し、現実の客観的に真実な芸術的表現を求める創作方法――に、現実的な歴史的性質を与える根本的なものは、その方法を与える根本的なものは、その方法を取る作家達の実践的生活及び世界観である。[40]

森山は否定的リアリズムを糾弾し、日本のプロレタリア作家はソビエトの創作方法を共有できると主張することで、作家の世界観の動揺を防ごうとした。そして、以下のような主張をおこなうまでに踏み込む。

けだし、プロレタリア作家は、歴史的必然の道における歓喜に溢れた建設の諸過程に対しても、歴史的没落の道における他の階級の醜悪に充たされた生活過程に対しても、ひとしく一つの芸術的態度をもつて臨むべきだからである（中略）プロレタリアートの見地に立つといふことは、出来上がつた観念によつて現実を捉へることではなくて、現実そのものの弁証法的発展を把握することである。現実の「ネガテイヴ」なモメントと共に「ポヂテイヴ」なモメントをも捉へることである[41]（傍点原文）。

このようにして、社会主義リアリズムは森山啓によっても、日本のプロレタリア文学のスローガンと位置づけられた。森山は社会主

義リアリズムの主唱者として、ナルプ解散後のプロレタリア文学を支える理論家の地位を確立したのである。

三　社会主義リアリズムと非政治化

しかし森山の論理に重要な点が抜け落ちていることは、既にあきらかだろう。そこには現実認識の方法そのものでなく、実際に認識された日本の現実への視点が存在しない。すなわち日本の現実にプロレタリア作家はどう対処すべきかという、問題意識が欠落しているのである。

もとより森山は、「社会主義的リアリズムの問題をリアリズム一般の問題に解消し、階級的見地を抜きさつてゐる作家達が、現実において多い」[42]傾向に批判的だった。そして「作家達がプロレタリアートの見地に立ち、その世界観を把握し、現実認識に於て唯物弁証法に導かれることによつて、真に過去のリアリストの歴史的、階級的限界を超えることを保証される」[43]と繰り返し主張し、プロレタリア文学の党派性――プロレタリア文学をプロレタリア文学たらしめるもの――を堅持する姿勢を崩さなかった。「思想というものはいったんめざめたら、眠ることはできない」という言葉は、当時の森山の姿勢を象徴している。だが森山の党派性の擁護が、何を意味するか確認する必要がある。

一九三四年を通して、森山は長谷川一郎や川口浩のほかにも様々な評論家と論争をおこなっている。なかでも最大の論敵は、保田与重郎と亀井勝一郎だったといってよいだろう。[44]『文学評論』五月号には「プロレタリア文学を守れ」という巻頭言が掲載されたが、これを保田は「何が一体今日のプロレタリア文学か(中略)守れといふ根拠があり、地盤が果してあるか」[45]と攻撃した。森山はプロレタリア文学擁護のため、次のように反論する。

彼等によれば、プロレタリアの「地盤」は、プロレタリアートの……〔前衛?〕なのである。それが「地盤」でもあり「支柱」であると考へてゐるのである。これこそ、「委託者」の考へであつた。指導するものと、「地盤」とをまちがへてゐる。(中略)プロレタリアートの組織力が如何に微弱であらうとも、プロレタリア大衆が存在し、その生活の現実過程が存在し、前述の社会的・階級的矛盾が解決されてゐない限り、文学はそれを反映せざるを得ないし、またプロレタリア大衆は、自己の生活の真実を描いた文学的表現を持ち、また求めるのである。こゝにこそプロレタリア文学の「地盤」があるのである。[46]

ここでも森山は、プロレタリア大衆が存在する限り、プロレタリア文学の党派性を守ろうという姿勢を堅持する。しかし森山はその党派性について、「あらゆる文学は作家が意識すると否とを問はず、現代では決して超階級的なもの、超党派的なものではあり得ない。それはいづれかの階級的必要を表現し、そのイデオロギーの一形態として存在してゐる」[47]と、一般的な説明をおこなうに過ぎなかった。一般的な定義を根拠とした党派性の擁護は、現実の階級闘争の様相からプロレタリア文学を切り離す危険性をはらんでいる。「あらゆる文学は作家が意識すると否とを問わず」、「いづれかの階級的必要を表現し、そのイデオロギーの一形態として」存在し、それがプロレタリア文学の党派性と強調されるならば、プロレタリア文学は前

衛＝共産党が敗退し、「プロレタリアートの組織力」が微弱になろうとも存在できることになる。つまり過去のナルプによる組織活動や政治的実践は、創作実践にとってナンセンスだとする思考を生みだしかねない。

森山による党派性の堅持とは、実は文学は現実にどう対処すべきかという、政治的な問題意識を消去することによって成立していた。階級闘争の実際がどうあれ、プロレタリア階級が存在し階級矛盾が発生すると意識されうる限り、プロレタリア文学の「地盤」は政治とかけ離れた地点で安泰である。文学の党派性を守るためには、そうした方法が最も簡単だった。結局、「現実的な力を持たない」「プロレタリア文学の現勢」は、森山によって次のように評価される。

それは動揺でもあり、矛盾でもある。そしてそれが本当の私達の姿である。

だから私達は自分を粉飾しないとともに卑屈にもなり終らない。作家達における動揺や矛盾は、現実の社会状態のあらはれでもあり、作家達がみじめさを持つてゐるといふことは、みじめな社会状態によつて制約されてゐるといふことでもあるから、それを吾々の性格の内部における永遠に救はれぬ欠陥だとは見ないのである。[48]

森山は、プロレタリア作家の動揺や矛盾を社会的制約のためとしながら、その社会的制約を無視した。唯物弁証法的な現実認識を唱えながらも、敗北を迎えた過去の文学運動における誤謬はどこにあったのか、そして「みじめな社会状態」を文学はどう打開すべきかといった問題意識は、森山の論に存在しない。前節ではナルプ解散における非政治化について言及したが、非政治化とは、単に政治活動の放棄や組織からの離脱をさすだけではない。文学その他の芸術活動が、社会現実をいかに認識しその現実にいかに働きかけるかは、その活動に付帯する最低限の政治性であろう。そのような働きかける姿勢が喪失されることこそ、非政治化なのである。森山啓もまた、プロレタリア文学の党派性を守るがゆえの、非政治化への道を歩んだのである。

現実への視点を欠いた森山にとって、「みじめな社会状態」下でのそれなりの文学活動は、擁護すべきものにとどまり批判の対象にはならない。それは「みじめでありながらその階級的性質において、プロレタリア大衆の生活利害に結びついてゐる点で、やはりプロレタリア文学である」[49]、「ナルプ時代には書かうともしなかつた、また書いても受けつけられなかつた多数の作家の、独創的自由をのばした作物がある。われわれはみづからの正しい努力をもつて、その独創的自由を、プロレタリアートの階級利害の上に立つたものとなし得る」[50]と、手放しで肯定された。

かくして森山啓は、「みじめな」現実下にあるプロレタリア文学を、文学運動における政治性――現実への視点――を消去することで合理化するに至った。森山の社会主義リアリズム論も、プロレタリア文学の非政治化、すなわち現状肯定を合理化する論理として機能することになったのである。

一九三四年八月一七日から九月一日にかけて、第一回ソビエト作家同盟大会が開催された。大会の模様は『文学評論』『文化集団』

などで日本にも紹介され、一一月には報告や決議をまとめた『第一回全ソ作家大会報告』が発行されている。その中におさめられた「第一回全ソ作家大会によつて採用されたソヴェト同盟の規約」の前文は、社会主義リアリズムを以下のように規定していた。

プロレタリア……〔独裁〕の数年間、ソヴェト芸術文学およびソヴェト文学批評は労働者階級と共に歩みつゝその新らしい創造的原則を創り上げた。結果の中に含まれたるこれらの創造的原則は、――一方では、過去の文学遺産の批判的摂取、他方では社会主義的リアリズムの原則の中にその主要なる表現を見出したのである。

ソヴェト芸術文学批評の基本的方法たる社会主義的リアリズムは、現実をその……〔革命的〕発展のうちに、正確に歴史的・具体的に形象化することを芸術家に要求してゐる。この際、芸術的形象化の正確性並びに歴史的具体性は、勤労大衆を社会主義の精神において思想的に改造し、教育するといふ任務と結合しなければならぬ。

社会主義的リアリズムは、芸術創造に対して、創造的イニシアチーブの顕現、並びに多様なる形式、スタイルおよびジャンルの選択の特殊な可能性を保証してゐる。(51)

ここでは社会主義リアリズムが、プロレタリア独裁の実現によって提唱され、社会主義建設に寄与する「基本的方法」であると明確にうたわれている。さらにソビエトにおいては「勤労大衆を社会主義の精神において思想的に改造し、教育するといふ任務」が芸術家に課せられ、その限りにおいて「芸術創造」の「特殊な可能性」は保証されていた。社会主義リアリズムとは、芸術創造に関する「特殊な可能性」を保証するとはいえ、政治の優位性が厳然と貫かれた「基本的方法」だった。極端にいえば、社会主義建設に貢献する――スターリン支配体制擁護の――創作実践であれば、何をどう描いてもよいということである。この厳然たる政治優位の原則以外、社会主義リアリズムの具体的内容は、規約には何も語られていなかった。

すると日本でプロレタリア文学の非政治化の論理として使用されてきた社会主義リアリズムは、一体何の意味をもっていたのだろうか。少なくともそれが、政治優位の原則に貫かれた「ソヴェト芸術文学批評の基本的方法」と異なることは、規約前文を一見して明らかだった。『文学評論』一九三五年一月号は「『第一回全ソ作家大会報告』を読みて――諸家の感想」を掲載しているが、ここで平林たい子は次のように述べた。

「社会主義リアリズム」は日本の作家の間に漫然と使用されてゐるやうな、超段階的なスローガンではないらしい。(中略)日本のプロレタリヤ作家がこの「社会主義」の意味を、理想としての社会主義の如くに解して漫然とこのスローガンを自己のスローガンとなし得るかのやうに考へてゐた誤謬は、直ちに訂正されなばなるまい。と同時に、我々の現実の再検討によつて、我々は、究極に……リアリズムを望見し得る、一つのスローガンをかゝげなければならない急務にさらされたわけだ。(52)

平林は、社会主義リアリズムが日本のような受容形態では、プロレタリア文学運動のスローガンとして有効性をもたないことを指摘

した。同じ記事では「超段階的なスローガン」の推進役である森山啓さえ、「僕は「報告」を読んで実際恥しくなつた。批評家は社会の現実及び文学史ともつと取組まねばならない」[53]と反省の弁を語っている。

「ナルプの解散につづく数ヵ月間は、あたかも魔法の呪縛から解き放されたように、作家たちは自由を謳歌し、ルネッサンスの到来を予言した」（栗原幸夫）[54]。しかし一九三四年を終えようとする時期にあって、プロレタリア文学の創作方法をめぐる議論は行き詰まっていた。平林たい子の感想を読んだ中条百合子が、「意味ふかい社会主義的リアリズムの提議が漫然と超段階的なスローガンであるかのやうに作家の間に使用されるやうな影響のしかたで、日本に紹介されたのであつたらうか」と、「沈思」[55]せざるを得ない状況に陥ってしまったのである。

おわりに

平野謙は、森山啓を「終始一貫プロレタリア文学擁護の論陣を」張り「社会主義リアリズム論の日本的消化のために孤軍奮闘した人」であり、その論文には「作家同盟解散以前と以後における質的な相異がほとんどみられなかった、といっていい」[56]と評価した。しかしこれまで見たように、社会主義リアリズムはナルプが解散することで、プロレタリア作家の非政治化を合理化する創作方法として日本に迎えられた。一九三三年の段階の森山啓は、唯物弁証法的創作方法における政治主義偏重の欠陥を追究したが、社会主義リアリズムの日本への適用には慎重を期していた。ところが翌年には、日本における社会主義リアリズムの正当性を力説した。この変化は理論の日本的消化というよりも、森山自身の政治的視野の放棄が要因となっている。

一九三五年にはいると、非政治化の論理としての社会主義リアリズムに対する批判が、久保栄・神山茂夫らによって提出された。組織論・運動論に力点を置いた久保・神山の「反資本主義リアリズム」「革命的リアリズム」に対抗し、森山啓・中野重治らは、芸術理論としての社会主義リアリズムを擁護した。いわゆる「社会主義リアリズム論争」である。この論争でも森山は、最も熱心にプロレタリア文学の「階級的独自性」を擁護した。

森山は「「思想の血肉化」は困難だと云ふ考へ方は、実際には、社会現実に対する認識の安易さを、真の思想への侮蔑を意味しないやうにありたい」[57]との自戒を述べていた。だが言葉とは裏腹に、党派性の擁護ゆえに現実への関心が希薄になる森山の傾向は、論争を通して強められていった。結局森山は久保栄に論破された形で、三五年の後半には社会主義リアリズムの検討から離れていった。[58]このことは、非政治化によるプロレタリア文学擁護の蹉跌を意味する。

現実との緊張関係が少なくなる分、森山の論理は危機意識に不感症となり、反ファシズム人民戦線の契機をもたなくなる。一九三五年一〇月、森山は島木健作とともに『文学界』同人となった。同年後半は、労働運動を中心に反ファシズム統一戦線への志向が高まりつつあった時期である。文化運動においても統一戦線の実現をのぞむ声があがっていた。[59]小林秀雄・川端康成・林房雄らが中心となっていた『文学界』への二人の参加は、プロレタリア陣営の作家評論

家の間で賛否両論を生んだ。[60] だが支持者も反対者も、ブルジョア作家とプロレタリア作家の協力による反ファシズム統一戦線＝人民戦線の結成を望んでおり、ここに紹介する投稿意見のように、『文学界』改組がその一形態となることを期待していた。

島木・森山二氏の「文学界」参加にしても、我々は長い目で見る必要がある。(中略)森山・島木氏らが作品及び評論においても転向したのならばとも角、小林秀雄・林房雄氏らにしてもファシズムに賛成した訳でもなく、彼等の誤謬を具体的に批判し我々の側に引き寄せる為の執拗な働きかけは、むしろプロレタリア作家の義務ではないか！(中略)あらゆる方面から可能な限りの方法によつて、大衆的反ファシズム統一戦線が緊急に建設されなければならない。[61]

ところがこうした期待をよそに、森山は人民戦線への志向を持っていなかった。「僕が『文学界』へ加つたのは「マルクス主義的批評家」として『文学界』内で少しでも策動しようなどといふ根胆(ママ)あつてのことではない」[62]とし、人民戦線擁護の立場からの批判を、「ファシズム反対一般の理屈を振りかざして(中略)今日の文学者のグループの仕事にはつながりを」[63]もたないと冷笑した。森山は人民戦線に決して不賛成なのではない。だが人民戦線という階級闘争の戦術を「一般の理屈」とみなし、「今日の文学者のグループの仕事」と切り離して考えていた。こうしたプロレタリア文学を代表する評論家が『文学界』に参加しても、人民戦線への期待がもてないことは明らかである。『文学界』に参加したのちの森山は、現実への無関心から体制無批判ひいては体制順応という、なしくずしの転向のコースを歩んでいった。

本稿における社会主義リアリズム論の検討は、プロレタリア文学運動と人民戦線との関係を考えるうえでの前提にすぎない。森山啓に代表されるプロレタリア文学の擁護の動きが社会主義リアリズム論争を経て、党派性の維持を試みながら人民戦線と離反していく過程については、次の機会に述べたいと思う。

註

(1)『現代日本文学辞典』五六二頁、一九五一年　河出書房。執筆は荒正人。

(2) 戸坂「文芸評論家の意識」『戸坂潤全集』第四巻、一一一頁、一九六六年　勁草書房。初出は『改造』一九三四年八月で表題は「文芸評論家のイデオロギー」。

(3) 大宅「文壇イデオロギー分布図」『文芸』一九三五年一月、二一九頁。

(4) 犬丸義一『日本人民戦線運動史』(一九七八年　青木書店)、小田切進・倉和男編「日本における人民戦線的動向に関する文献目録」(『季刊世界文学』四号、一九六六年夏)参照。

(5) 戸坂「所謂「人民戦線」の問題」『戸坂潤全集』第五巻、四八頁。この論文は「人民戦線に於ける政治と文化」という題で『セルパン』一九三六年九月号に発表され、加筆のうえ『世界の一環としての日本』(一九三七年　白揚社)に収められた。

(6) 同前、五五頁。本稿では「人民戦線」という言葉を、戸坂潤のように「反ファッショ的な人民の戦線」という意味で使用する。したがって国際共産主義運動がコミンテルン第七回大会において構図を描いた「人民戦線」とは、意味が異なる。

(7) 同前、四九頁。

(8)『国史大辞典』第七巻、九三三頁、一九八六年　吉川弘文館。執筆は神田文人。

(9) 司法省刑事局、思想研究資料特輯第七七号『人民戦線と文化運動』一五頁、一九四〇年（社会問題資料研究会編『社会問題資料叢書』（一九七三年　東洋文化社）所収）。「京都に於て」とあるのは、『世界文化』『土曜日』の活動をさす。

(10) 犬丸義一は歴史科学協議会第二三回大会報告「プロレタリア文化運動から民主主義文化運動へ」で、「人民戦線文化運動」を「一九三一年九月一八日の「満洲事変――柳条湖事件」の勃発以後の戦争とファシズムの時代に対する抵抗運動としての文化戦線および学術研究戦線に現れてきた統一戦線運動であり、そのなかにおけるマルクス主義と非マルクス主義の統一戦線運動、ファッショ的な、非文化とか非科学に対する科学性・学術性を擁護するところの文化運動・科学運動である」と位置づけた（『歴史評論』一九九〇年一月、七一頁）。犬丸は人民戦線文化運動の萌芽を、唯物論研究会と歴史学研究会と『歴史科学』誌とに求めているが、文学運動と人民戦線との関係についてはふれなかった。文学運動における人民戦線がなぜ実現しなかったかという疑問は、犬丸が文学運動をプロレタリア文化運動の中核と位置づけ、ナルプ解散や鹿地亘の組織論などにも時間を割いて報告していただけに強く残されている。

(11) 徳永「創作方法の新転換」『中央公論』一九三三年九月、二一九頁。

(12) 森山「批評家への希望。方法と世界観　レアリズムと唯物論」『プロレタリア文学』一九三三年一〇月、四二頁。

(13) 大場文夫（池田寿夫）「文芸時評　徳永直の攪乱者的態度・作品評他」『プロレタリア文学』一九三三年九月、二七頁。

(14) 林房雄「プロレタリア文学の再出発」『改造』一九三三年一〇月。

(15)(16) 森山「創作方法と芸術家の世界観」『文化集団』一九三三年一一月、二二頁。

(17) 「芸術的方法についての感想」『蔵原惟人評論集』第二巻　二〇〇頁、一九六八年　新日本出版社。初出は『ナップ』一九三二年九月・一〇月。

(18) 前掲森山「創作方法と芸術家の世界観」二一頁。

(19) 前掲徳永「創作方法の新転換」二二頁。

(20) 『文化集団』一九三三年一一月、六五～六八頁。

(21) キルポーチン「社会主義的レアリズムについて――問題の審議に寄せて――」（久野三郎訳）『文化集団』一九三三年八月、三一頁。初出は『プラウダ』一九三三年五月七日。

(22) 同前、三二頁。

(23) 社会主義リアリズムが「過程」とされたことによって、正しい方法と認めるようになった作家として、窪川稲子があげられる。窪川は「何故弁証法的唯物論の方法ではなくて、社会主義リアリズムの方法なのか」「どうしても解らなかつた」が、以下のように納得する。「私のこの疑問もまた正当である。弁証法的唯物論、といふのは、人間の思惟に一定の高さに於て反映されたところの世界観であつて、多くの、未だいろいろの段階にある作家たちに一様にまづその世界観を要求することは誤りであり、作家はまたその創作過程に於てのみ成長するものだ。従つて作家の創作態度を規定するスローガンとしては、社会主義リアリズムのスローガンでなければならぬ。」（「創作方法に関する感想」『文化集団』一九三三年一一月、六六～六八頁）。

(24) 前掲森山「創作方法と芸術家の世界観」二三頁。

(25) 前掲キルポーチン「社会主義的レアリズムについて」三一頁。

(26) 鹿地「ナルプの解散について」『文学評論』一九三四年四月、五七頁。

(27) プロレタリア文学の持つ原則を放棄したナルプ指導部にとって、政治と文学の分離を主張したがゆえに「右翼的偏向」のレッテルを貼られていた林房雄は、もはや敵ではない。林は「作家同盟は、今、分裂すべきである。分裂して、五つか十の作家団にわかれ、各々の団体が活動機関としての雑誌をもち、おたがひに作品による競争をはじめなければならない」（「一つの提案――プロレタリア文学再出発の方法」『文化集団』一九三三年一一月、特七頁）と主張していた。鹿地亘はそれを「林は敏感に、おそらく自身の本能的な希求からこの結論に到達した。まさに林は作家たちの

内心の欲求を最も敏感に代表した」（「ナルプの解散について」五七頁）と称賛する。

(28) 日本プロレタリア作家同盟第三回拡大中央委員会「ナルプ解体の声明」『プロレタリア文学資料集・年表』三四〇～三四一頁、一九八八年新日本出版社。

(29) 「「創作技術に関する問題」の提唱」『文学評論』一九三四年四月、二頁。

(30) 川口「否定的リアリズムについて」『文学評論』一九三四年四月、四頁。

(31) 同前、七頁。

(32) 鹿地亘『自伝的な文学史』二一一頁、一九五九年　三一新書。

(33) 森山「文学運動の現在　作家同盟の解散について」『帝国大学新聞』一九三四年三月一二日。

(34) 長谷川「主体的リアリズムの問題」『人物評論』一九三四年二月、六六頁。これより先に長谷川は、「「唯物弁証法的創作方法」の否定――「社会主義的レアリズム」と「革命的ロマンチシズム」の正当性のために」（『唯物論研究』一九三三年九月）を発表している。その結論は、社会主義リアリズムが「何等の問題なしに、そのまゝ日本にも受け入れられるべきであると言ふならば、それは決定的な誤りである。そのスローガンは、現在のソビエートの種々な条件を基礎としてのみ正当なのであり、ソビエートにおける政治的＝文化的任務を内容として持つてゐるのである」となっていた。翌年発表された「主体的リアリズムの問題」でも、長谷川はこの姿勢を変えていない。

(35) 森山「芸術的方法と科学的方法についての小感――および論争についての雑感――」『文化集団』一九三四年九月、二四頁。

(36) 森山「創作理論に関する二三の問題」『文化集団』一九三四年四月、一四頁。

(37) 前掲川口「否定的リアリズムについて」一一頁。

(38) 森山「六号雑記」『文学評論』一九三四年五月、一八二頁。

(39) 森山「「否定的リアリズム」の批判」『文学評論』一九三四年五月、一三六頁。

(40) 同前、一三七頁。

(41) 同前、一三八頁。

(42) 前掲森山「創作理論に関する二三の問題」一五頁。

(43) 前掲森山「「否定的リアリズム」の批判」一三八頁。

(44) 亀井勝一郎は、「蔵原のごとき政治的明確性をあやふやにして、しかも指導的理論といつた面つきをしながら社会主義的リアリズムをふりまはす批評家が多いが噴飯ものである」（「批評家として」『文学建設者』一九三四年七月、七四頁）として、森山に「観照主義」等の非難を浴びせた。また亀井は社会主義リアリズムが果した役割を評価しながらも、次のような自己批判を述べた。それは、ナルプ解散後のプロレタリア文学運動にたいする批判となっている。

つまり、私共は非常な片手落ちをやつてゐたやうである。社会主義的リアリズムそのものに頼つて、今日に生きる自己の苦しさに眼をつぶつた。もし私共がほんたうにこの国の現実に鋭い眼を放つてゐる芸術家であつたならば、芸術の欠陥を政治的経済的運動の欠陥にむすびつけて論議すべきであつたのだ。文学上の「政治主義」のみならず、実際の運動全体にみなぎる観念的傾向をも大胆に一撃すべきであつたし、私共を日和見主義者、調停派、敗北主義と酷烈に批判したその人の政治的地盤に直截に我らもまた批判のメスを振ふべきであつたのだ。そのためにはその政治的地盤へ身を処すべきであつたらう。ところが実際は、「政治主義」を批判しつゝ私共は政治そのものから目をそむけてしまつた。文学の領域内でのみ文学を解決しようとしてゐた。つまり私共は徹頭徹尾階級闘争の見物人にすぎなかつたのだ。日和見主義といふ言葉は単なるレッテルではなかつたのである（「文学における意志的情熱」『亀井勝一郎全集』第一巻、五〇頁、一九七一年　講談社。初出原題は「文学と政治

――文学における意志的情熱の相(三)」『現実』一九三四年六月)。

しかし亀井の軌跡は、この自己批判の方向に全く進まなかった。「現在の私にとつて、政治はひとつの憧憬である」と語る亀井にとって、「憧憬」の対象は現実政治そのものではなく、あくまで政治に対して抱く人間の情熱だった。階級闘争の具体化にむけての現実認識など、眼中にはないのである。その点「観照主義」といかに非難しても、非政治化の道を歩んだことについては亀井も森山と同様だった。亀井は結局プロレタリア文学から離れ、『日本浪漫派』の活動に入っていく。

(45) 保田「依托者の有無(文学時評)」『保田與重郎全集』第六巻、四八五頁、一九八六年　講談社。初出は『現実』一九三四年六月。

(46) 森山「一九三四年度の文学における諸問題」『文学評論』一九三四年一二月、一一頁。

(47) 同前、一二頁。

(48) 森山「プロレタリア文学の現勢」『中央公論』一九三四年七月、三六二頁。

(49) 同前、三六二～三六三頁。

(50) 同前、三七一頁。

(51) 『第一回全ソ作家大会報告』二五四頁、ナウカ社。伏字部分は『資料世界プロレタリア文学運動』第五巻(一九七四年　三一書房)所収「ソヴェト作家同盟規約」(江川卓訳)により補充。

(52) 平林「二つの点について」『文学評論』一九三五年一月、九〇～九一頁。

(53) 森山「自分への言葉」『文学評論』一九三五年一月、九八頁。

(54) 『プロレタリア文学とその時代』二三八頁、一九七一年　平凡社。

(55) 中条「新年号の『文学評論』その他」『文学評論』一九三五年二月、一一六頁。中条は、「日本において、直ちに社会主義的リアリズムといふスローガンをそのまゝ適用し得るかどうかといふことは、活発な大衆的討論によつて決定されるべき点でせう。社会主義的リアリズムの問題の提起は、(中略)プロレタリア文学に関するあれやこれやの問題の一つではない。全プロレタリアートの……(戦線の前進)と伴つて文学運動が推し進められる基本的発展の最も真面目な一環であると思ひます。」(「社会主義的レアリズムの問題について」『文化集団』一九三三年一一月、伏字部分は『宮本百合子全集』第十巻(一九八〇年　新日本出版社)によって補充)との認識を得ていた。だが中条は一九三四年一月から六月まで検挙拘留され、ナルプ解散と創作方法に関する議論に参加することができなかった。

(56) 「文学・昭和十年前後」『平野謙全集』第四巻、三二六頁、一九七五年　新潮社。中村完「社会主義リアリズムの問題――森山啓の評論を中心に――」(『国文学研究』二五集　一九六二年)も平野の見解に同意し、「「質的な相異」がないということは、森山の階級的なリアリズム認識が不動のものであったことの証明になろう」としている。森山の一貫性が政治の拒否によって成立していることを指摘しておく。

(57) 森山「未だ我流で通す」『早稲田文学』一九三五年二月、一九頁。

(58) 神谷忠孝は「社会主義リアリズムに関しては当時の抑圧強化が論争の展開を不可能にした」と述べている(「森山啓の評論――社会主義リアリズム論争前後」『国文学研究』三六号、一九六七年二月)。しかし論争の舞台となった『文学評論』の発行元ナウカ社が軍機保護法違反容疑で弾圧され、『文学評論』が発行不能となったのは一九三六年七月である。森山は「反対論者達に答へる」(『文学評論』一九三五年六月)を最後に論争から離れ、以後社会主義リアリズムを扱った評論を発表していない。森山が論争から離れた理由を、抑圧強化のためとすることはできない。

(59) たとえば訪米を終えた直後の、日本労働組合全国評議会(全評)委員長加藤勘十の発言。よく知られているように、加藤は米国で野坂参三と会見していた。「私は、非常にルーズな形態でいゝから、日本に知識階級の文化運動をもつと起こしてもらひたいとおもふ。日本にも、まだまだその自由はあるとおもふ。さうなると、我々の組合運動も非常にやりいゝんですがね」(『時局新聞』一九三五年九月一六日)。続いて『時局新聞』九月二

三日号は、学芸自由同盟(一九三三年に結成された反ファシズム文化団体、三五年当時は活動停止状態だった)の再興を提唱している。

(60)　大宅壮一は『文学界』を「馴れ合ひの聯合チーム」と評し、小林秀雄や林房雄らと手を結んだ森山・島木が、「ブルジョア的もしくは封建的芸術派文学との闘争を、今後どういふ方法で誰を相手にしようとするか」と批判した(「文学界の新同人に問ふ」『東京日日新聞』一九三五年一〇月二九日)。これに対し勝本清一郎は、現在のプロレタリア作家の闘争が「ブル作家を味方と見る事を要求してゐる」として、『文学界』改組を支持した(「調停派の弁『文学界』の改組問題」『読売新聞』一九三五年一一月五日)。

(61)　井東繁「芸術・文学における反ファシズム統一戦線の確立について」『文学評論』一九三六年二月、一三三頁。

(62)　森山「貞操帯」『文学界』一九三六年一月、一六三頁。

(63)　赤星白光という筆名による「島木・森山の『文学界』参加」(『文学評論』一九三六年一月)は、『文学界』には「ファシズムに対する果敢な抗争と偉大な人類文化の擁護」という目標がなく、「プロ、プル文学の共同闘争が、『文学界』において成立したのは、自由主義が危機に瀕してゐるからではなく、プロレタリア文学が骨抜きになり、危機に瀕してゐるがために外ならない」との批判をおこなっていた。これに対する森山の反論が、(64)である。

(64)　森山「僕の『文学界』入りについて――文学雑誌の同人たることの意義――」『文学評論』一九三六年一月、一一六頁。